醫孫小史

全

笈之小文序

風羅坊芭蕉庵桃青翁と同じくハ
今世乃俳達人なり其門葉月々に
茂り日々に繁し門葉推て
数百年に及ぶ皆芭蕉翁の
教を聞て江戸深川の庵室に閑居
せしむる時に芭蕉を慕ひ
参りし拙者上京せり彼

ものがたりの時代すべて此の記を集て
これをなつかしみて筆のことゝのゝ
積て漸法輪となる是亦なを
脫て也は戯てい奇伽のゝ多をまゝ月
まゝりして八四十四百韻の色を海
爾來門葉多しとゝも唯乙州
よのゝ投句をむしろ孤生群第
とゝ共はせさるゝことなきもの今般

捧はちりしめて世傳と成ん
と欲して物すめしゝゝ偏は病よ
遇て息恙暫愈日と俟はゝるる
江州大津松本之隱士觀桂堂
破石子
宝永四丁亥孝春乙州之間
慇求不得止深筆畢

笈の小文

風羅坊　芭蕉

百骸九竅の中より物ありかりよりて形ち
現坊空しく滅ようすれば形ち破れ
やすきことはいまだあらず。これ
白と好とを入し孤を生涯すなら
くなすあるべき時を捨て放擲せん
ものをおもひある時をすぎて人な

如何もを求うと見れば徒事にて
うつて見うるよりは勇安うして次に
男をとむしうとねんとおもはるるよ
さへられ暫の間にて為と嘆こうと思へ
ども見うるよりは無能云
蔵うして只は一筋に拙家雪の
の和哥よりあるうるに紙の上のよりある
雪舟の絵うよりあるよりは利休の茶おうる

其雅
雅を一なりとうるに風雅
よりあるうるは造化をうひて四時と
なうすうるよりあるいうる
なしおもうに赤月にのすいうる
像花よりあうさうに人物をひうん
花にあうさうる時をうる歌よりあ歌人物
を虫うに歌を離れて造化をうひ
造化よりあうさうに

神宮に物をこうなりて
角ゝ風雪深く
旅人と思ひ
又山家に宿を乞くりて
黒塩乃住老ゝ
分て其角ゝ
りてなす
時ゝ
のとこゝろ

十句ゝ
作りゝ
お親
ゝて
志と
力と
慣ゝ
つゝ

人色あるいは小船とうの人別墨を
流すけしの菴ゟ酒肴抱乗り
て行潮と流しをかしみなを
出さるる趣へ（ある人の首途する
まを仰ちゝ）いとゝ抱めらく見て
死れられ
抑道の日記也いまの世紙民
長明河佛の信文と始る人情

と無してくら餘世皆付似ゟ
ひ多其糟粕を改るもあるます
流して流者紙丈筆ゟ及へく
もあるすを日世面降居さら
時てさるを松るかことなのゟ云門
流れちなていまれ（ものを）
へく完れゟ其多義新丈
さらひあるすゝ云ゟなのれ

はれるまゝ而て此あんを詠り
山鼓形亭の[illegible]
[illegible]の程ゆ[illegible]なり此[illegible]の[illegible]
[illegible]おひなしてゆ[illegible]
やはんやゝ書集[illegible]て[illegible]
[illegible]に怪[illegible]ひとくいれる人の
讒言するゝ[illegible]ひとなして人
又元[illegible]ぜら

以[illegible]よりて
[illegible]乃園を[illegible]
[illegible]雅[illegible]
[illegible]て[illegible]遠くなるみ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三川の國保戸田いるかはまの
志のいてゝるとを始うと幕と
まの郷人は清長して海ら
ゆさまの二十五里尋ねてきま
吉田より海ら
元禄二人答橋を新
あまは健を田の中は細人あり
て海ら此よりいとを出し

その日ゆてゝ沢風新井所
保戸村ら保戸吉濱を里半
ゆゝこの濱地はなくく
保野と海岡ゆてゝる所なれる
いくもるまら万葉集より保樂
久の浦は撰入られし測場て
其石を拾ひ学ないて白といる
や貴山と云ハ鶴を求めるなら

有れ海のさてまく鶴のくらしかん
浪る所と貴いこ鶴なと一斉も
よめりくり也おり人ても与あくれ
なる折ゆし

鶴一つ見負えれしいこ濱
執田御依霞

磨なくと寸讀も清し　雪の花
逢たる人さよむぞひこされて

去らく体息する羽
笑粮こす今もみらしと櫻宮
みつ人の舎

なつけて雪の全まる家かみさふ
いさりきて雪見のよこらめ雨まて
あら人無行

兵さ探る梅よ義見る新婦ふ
しけ召是濃大姫汝阜れさてえん

三嶋より乗りて一宮迄あるハ一里
なり　三嶋の及
師走十日ばかりやと知る四里
ハ入るなり
箱根にてみやうきせの湯をとり
寄るなりとて温めれども云
日永の里なりとて杖つき坂
上るなり箱根ちかくなりて

箱根

歩のなりて杖つき坂と云ふ
とおるさのあるなり云坂は孫よ
雨ふりしなり
四里や勝の坂屋にての書
宵よりの元の名所おし　十年ぶり
酒のみ歌ばかりして元の勝とすれば
二日もかうへせるものなり

初春

去年まいりの野山に
植ぬやうくさけるもの一二寸

伊賀の國の城の庄にて
京上人の四條の濃厚山新大仏
とゝやいふなる千歳の松を
切りて船にはこぶと聞し
坊舎を移して田畑とするの形勢

丈六乃弓像は昔の縁を墨て
のゝ現前と、まうされる所の人
の出家はいまゝ金おとゝ
甚代乃名殺うゝ
討ゝ乃代乃
菩薩のよう推少双林の
拾もものあるよう
丈六はかをゝ

さゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

伊勢山田

伊の[illegible]

深[illegible]

芙蓉山

[illegible]

龍尚舎

[illegible]

現代民[illegible]

梅[illegible]

[illegible]庵舎

[illegible]

神垣のうちに梅一本もなしいふ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よしをかたりつたふ
御子良子の一もとゆかし梅の花
神垣やおもひもかけす涅槃像
弥生半過る程そゝろにうき立心
の花の我を道引枝折となりて
よしのゝ花におもひ立んとするに
かのいらこ崎にてちきり置し人の
い勢にて出むかひともに旅寝のあはれ
をも見且ハ我為に童子となりて
道の便りにもならんと自万菊丸と
名をいふまことにわらへらしき名のさまいと
興有いてや門出のたはふれ
事せんと笠のうちに落書ス
乾坤無住同行二人
よし野にて桜見せふそ檜の木笠
よし野にて我も見せふそ檜の木笠　万菊丸

[illegible]の具多さハ[illegible]さそうなるとも[illegible]
皆払拭されたる[illegible]の[illegible]をみさき
つ合[illegible]や乃和歌[illegible]かく[illegible]
なんとある色て[illegible]
いとくすねくしく[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

初鰹

[illegible]

[illegible]

菖蒲山

[illegible]

三輪　多武の峯

腮崎　多武峯ヨリ龍門(越)

雲雀[illegible]

龍門

[illegible]

酒のこゝろ[illegible]

西河

かろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

晴れゆく瀧

布施の瀧ハ布施の西の方二十町

山の奥〳〵

[illegible]

布施の川上なる　大和　葛城の瀧

布施の瀧

[illegible]

櫻

櫻のうつさゝくやゆくしの里六里

日もたけよ雲てさひしやあすなろふ

扇よて酒ふひやちる櫻

若清水

春雨のこもりてつゝ[illegible]

よのなかは三りう清りて曙はなれ
のまへまよむひるの明乃月のこと
なるを面なくんよ野ものう物よみち
てあるを嵯峨のなすゑなるうれ
あひの秋おもひかけ身をうら
見ゝくと山あらしうるはしたん
を掃もなくていさはらはとうち
なるいとになりて物ひとうる流

二月野

ちるさくらはしの緒の緩
ちるを惜みさくらの奥の花　万菊
和尚
物まはわけ浦まで追分ら
さみゝ井る

跪きやれて要ひよひくて於
の後しと皆りひるとかる何もいさ
よ今て取れいるんようよる野海
浪の兵系より造化の功とんあるも
安原の取出の絵と考ひ情の人
乃實をうかかり乾坤をきりて絵の
ねりしかし空をきれ遠平此世
中寛歩書るに人肉食肉らも

并しきあるなるにはかさりまく高へ
き切よ何なしに一分のねりに二つの
おの人絵筆かりんを鞭のわりをよ
ようなと取りんをいきいきれか
りしかの何を気を絵しまりに絵を
あるむりまりにんに雅ある人よ
出会ら仮かさりなまりまりに
うかるるアと悪く捨ちれ

乃人まこと去の物はれなかりあひ
ちまふむらさめ人出しる
なと原のうちにむと拾流中よ
金をはらん地してあるよ書付
人よもかりんをはしをみる拾
のひとはなりけ

衣更へ

一つぬひて後よ頃ぬ衣こへ

吉野出て布子書捨衣へ　万菊

灌仏の日もたふ日ふ宮かして
法ふ寺のと茶を入てけり
おのてもうしられて

灌仏の日まれあ寺の水

招提寺鑑真和尚来朝の時和
中七十餘年ぬ難と志のよ
此月乃ち場内入る孫よ月

[illegible]

四なるもの[illegible]

廉の角に一節のこれる

大なるあらんのもの

枯れ強きもの蔭のひとしき

源广

[illegible]

月見草

卯月中旬の花も終りてさうもあり

見しらぬ花月もいとも艶なるもの

わすれがたうさうかつてほとゝぎす

はつなつの光も海のうらにうつれ

るなり[illegible]

海あるひとあり[illegible]

故なれものゝ[illegible]

源士の新宮に入らるゝ事の
由所々西国所々と云ふ事わ
うれてなのもしらるゝ行ときすゝもみし
す蒙塵されつゝ奇なるさゝ給
ふ御いまゝのかゝわさするあとまゝすゝ
さすゝめいてゝ細してお海に
上るかちしまゝとかゝすれ業
はてつゝ去れとしらんとゝ

やとすて源氏わさをゝんすゝ
戦場乃ゝ義士やゝ伝へかゝるゝと
ちすゝやとゝ羅城ゝ祈むゝ法
立しゝ海にてのひゝ家の屋
すゝなきすゝかれゝうゝやく
いひまゝゝすゝと海にすゝて禁の
家居にて祈ゝすゝ云てわり
ちゝ神に入てゝらかれゝ十方を云ん

[illegible]
くるべきを敷石のえんをとして
羊腸険坦の出根とくひのうれを
すら蔓延さらあまてひちりをを
はし根はたりつくを長をとさら
しかをひとして漸まへはへて
ふりをちをさ導師のちををり
沢をのあまのををんをふら郭公

ほとゝぎす清水の方や沢つゝ
沢をちをふね笛をく本をを
明石夜泊
蜻蛉やをくををを夏の月
かゝ浦の橋ををとをを浦の實
をを秋をむねをををるをへををを沢
しをいをををを秋なりををいをを
ふのをくをををひ出へをあををを

そ[illegible]ん近の拙[illegible]と[illegible]ぬ[illegible]ら
[illegible]
の[illegible]なわ[illegible]東南の[illegible]
[illegible]
[illegible]
又海の[illegible]と隔て、田井[illegible]
[illegible]
[illegible]

のうさ逆[illegible]
[illegible]
やうさ光の[illegible]
こと[illegible]
[illegible]
と[illegible]
[illegible]
[illegible]

出羽ぶてあつひ温泉ぶたる
ぶてねんぶてて、ぶ中ぶ投入
備前ぶて出羽ぶてぶの餅ぶ
柳ぶ貴ぶてぶあぶの柳ぶ
ぶりぶく千里ぶ中ぶ
海ぶ出羽ぶぶぶぶぶぶ

義名古屋に滞留の時有
更科記行幸而爰に次

ぶぶぶ温ぶすて山の月ぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
てぶぶぶぶぶぶぶぶ
又ひぶ盛人ぶぶぶぶ
ぶぶぶ旅ぶ山ぶぶ
と岩ぶぶぶ奴僕ぶぶぶ
とのぶぶぶぶぶぶ
のぶぶぶぶぶぶぶ

ものてれたるとうしあとさきなるも
中くにおうてさるのこゝろ何くと
いふ事なるとゝ井のたんの傍り
ろけもおうしまもあしたあもしつく
とさうる猿くひまてあおひ色い
せうしくはるとすやしあめ
なれるとうしあるいるのあるれう
てものく方ひめけうしのたかの

後のあひねもはしはまうみてる
ひ身て西とそのようなのまうる心の峰
頭のようなあるひこりてたうさ河
ちれ岸下れまるのおりひとなし
天地もさいてうまうれい嶽のうへ
動ちうしたはあもうさ虹のやむ時
かい猿うしう藤うんちまうして猿の
たてたち詠なるへ四十八曲りとや

九月十五日にて雲なきよなれども
せめて風なりとも行きのこの船を
ゆかたのみかみてこそ海
さりもとしかぬ濡れて
もおろそかにすべきなれば
こゝあらぬ所にねられて暮れぬ
るあまりにひとりもとなかれら
又あけてあやしきことのみ

仏せいかのひんの坊舟にのんで
てあるひのすゑと推量して
とかくさんすわるとき時分に
うろうろ北行くとき北をさす
とはしをのうあしくりひ
しるれたるをしつて風を待
のさうとまりて行くを出るを
もせずとても海されて月の

ゆへの船れうにのるかたはの
てうれのもとにあるとおくるとこ
つるうにかるき秋のん宮に
あてやういてや月のいりに酒振
まうんと之さうさ出るよ
はねよ一さうもうさいて
ゆうるる荷物をとうろ船の人の
のうにはいはまとしてるる

ぬれさりもあらじ秋のはつかぜ

無ようく晴絶可危乃山ちか山

も不うるうり

あれ中よ苅繕書ゝ荷背

接やいりもとかせてうゝ

接やえんかひうるむゝ

雪白て接いかも始きれす　翁

　　姨捨山

何や姨ひうるかく月の夜

いさのひもさて法なの秋

さしもとよさの月人雲部　翁

ひうるも尚雲やとまし

月ひさて大根も秋の九

生涯なら浦老の人のえ

送れつ別かつ果いまの秋

　　長光寺

月刻四門四冊一つ
以ていとすべきものあらば
此記行終て後し州に渭水義を文
うき後及と雅に賦集くに後ぬるを
以惜く後集と加へもし企ぬ

江南枕々菴乙列捽之

寶永六年孟春慶日
京寺町二條上町
書林　井筒屋庄兵衛
同　宇兵衛板